俗說辨一　神祇

13
1834
1

13
1834
1-7
2.922
1-7

15
1271
1
3
1334
1

龍子先生著

俗說辨

京上 書舗 柳枝軒藏版

本朝俗說辨序

古來野史稗說之傳謬也俗相承以爲定說雖闖書者亦因循不改是以黃帝之昇天伊尹之空桑且采石之月傾沒于李翰林白酒牛肉枉死於杜少陵如此之類不可勝數焉其餘至仙佛之徒而怪妄不經之說不爲

不多矣雖中華亦然矣況於本邦
乎非具眼者則不能辨明之我友有
長秀丈徧讀國史略通習爲暇日舉
當時俗間所傳稱或差義理或誤事
跡及怪誕虛妄惑世誣民之說以辨
之證以正史實錄於是相承者知其
非因循者革其弊可謂補于立教也

輯以爲書號曰俗說辨起于神祇至
天子后妃公卿士庶婦女僧道而立
部分類合爲七卷其寫以倭字者欲
便于俗子不知書者也善哉其用意
爲烏乎格物窮理所以脩身之本也
故古人以一物不識爲恥也況事理
之繫于世道者乎丈其勤而不怠則

庶幾識聖賢教人非事物之外而一
一窮其理竭力開物以助於時用也
是君子處世之大端也我今以此望
於丈豈止此書之辨俗說而已哉

寶永三丙戌歲林鐘穀旦

左筠之有甫識

古朝俗說辨卷一 條目

神祇

一 天照大神を大日如來とつゝぷるゝ眞泰伯也
ゝ說并神璽乃說
一 賀茂皇大神ハ造化の權現まさるとつゝぷる或ハ
出雲路乃女の產るゝ子をさつるゝ也云說
一 八幡ハ菩薩号ある說付弘法大師ゝゝ乃御

一新乃宮并八流きの幡ぐらの說
一祇園牛頭天皇い天竺乃神とつゝ說
一春日大明神佛とたくらゝ說
一住吉大明神白樂天青苔白雲の詩歌の說
一東寺乃門前よて稲と云ふ老人と稲荷と崇ふ說
一山王擅現比叡山ゟ出現乃說
一出雲大社ゟ毎年十月諸神あつまりゝ說

一麻嶽大明神かゝめ石乃說
一敷田大明神楊貴妃となりて唐朝を乱ふ說
付蓬萊の說
一熊野擅現い天竺より飛來ふと云說
一愛宕宮擅現ハ日羅と化ふ。ゟ地い揚軍地蔵とつゝ說
一金峯山神ゟ金剛蔵王菩薩とつゝ或い安閑天皇
乃靈とさゝ法ふとつゝ相說

一富士浅間神を赫奕姫とまうす説 付富士
の孝靈霊帝宇宙の生起ととなふる説

一粟嶋大明神は女神なる事よ婦人乃病とする説

一大隅国八幡宮は天竺陳大王の孫といふ説

一厳島竹生島江嶋神は辯財天也と云説 付三神と
辰狐まぐ女といふ説

一大つまい天竺の神とつひ牧子戎夷子と祀る説

本朝俗説辨巻一

蟠龍子飾長秀輯録

神祇

○天照大神を大日如来とも。或は昊泰伯と云説 并神靈の説
俗説に云。むかしは国いまだなくうるさ。大海乃上を大日如
来文あり。天照を神天乃勢鉢とまうしてうさぎ殺よ。
そも滴家のごとく。第六天の魔王あまたとうくつの滴
国となりうで仏法流布まつく人生死と生べしと悟りし
うで。太神魔王より謂てのまつく。我三寶とちうづくまま。
そ名/彼も称せずとそうば。魔王怒びてあを懲る。

をよ面をあらりて押たるを。世くの人ことに。神宝是をあり
○又曰天照太神を女地大日如来なりと。此は大日如来国と
云○又曰天照太神い吳泰伯をこそ東海姫氏国と祈とる髮清を賜を。太神を女神とつよる。姫氏を倡
まつるものなり

今按るに幹をもつて大海をさぐり給ふい天照太神
よあるべし。神代巻に伊弉諾尊伊弉冊尊立於天浮
橋之上共計曰底下豈無國歟廼以天之瓊矛指下
而探之是獲滄溟其矛鋒滴瀝之潮凝成一嶋名之
曰磯馭盧島とあり。天照太神を国土既成て後うま

れ給へて○又神璽を鏡をグ剣をあるべし。神代巻に天
照太神乃賜天津彦火瓊瓊杵尊八坂瓊曲玉及八
咫鏡草薙剣三種寶物とあり。八坂瓊曲玉い神璽なり。
事文類聚に璽玉者印也。郷邪代醉編に天子獨以印
稱璽又獨以玉とあるに紀の神璽い天照太神乃神印
なる歟明らなり。禁秘抄に神璽筥中鏡程物動。返
〻不可傾とあるに。又天照太神を大日如来とつよる
大よ非なり。太神乃神徳光被四表格于上下寔とい
大日要貴と称ずるまもり。倭姫世紀鎮座伝紀寶基本
紀に載神託に曰。屏佛法息延喜式に。内外七宮乃忌

詞あり。禁秘抄に。内侍所に僧尼の贈物を献ぜず。殊に
神事六種の忌の中に。不預穢悪穢惣悪佛事とあり。
といへるまで二所ハ神家に僧尼の入ことを嫌ふを
しれり。神明の浮屠を忌ずといふ説推て知るべし○又
大日本国ハ大日の国なるゆゑにあるぞ。これ集に今所叙
惣合八洲名大日本者。由大日孁貴降孁故自有此名と
いへり○或曰俗説に天照太神ハ泰伯なりと三譲の
額宝冠に納めたり。これ則野馬台の詩に東海姫氏国と
いへり。是神を女體といひも姫氏とあやまりてなりと
いへり。

按ずるに。此説古来よりあやまり来るなるべし。釋圓月といふ者
東海一漚集作者
日本史を作つて朝に献ず。其書に泰伯をもつて始祖とぞ。このゆへに議ありて

祖とぞ。このゆへに議ありてわきまへ侍れどもいふべし。詳に蕉了子が
記せる史記抄の跋にみえたり。蕉了子ハ文明年中の人なり。志しげき
舊事紀古事紀日本紀にしたがひ似たる事をしるし。濱成の
天書廣成の古語拾遺倭姫世紀鎮座傳記本紀次第
宝基本紀神名秘書類聚本源集なども。うつく
しるさず。宝冠に額あるなる事ハ度會氏荒木田氏の知ざる
事なり。野馬台の詩ハ俗流に傳へたるなりとて書籍
にハ載ず。梁の宝誌和尚が讖文なりといへども。誌が傳にも
なく釋傳の中にもみえず。縦令宝誌作りたりとも。梁
僧のことなれば拠とするにたらんや。神皇正統記に呉朝の
一書の中に。日本ハ呉の泰伯が後なりといへるをかへそぐ

あるべきなりといへるよかるべの人我國乃書紀
をもとゝ。ひとるを商船僧侶乃はかまるせ年代をくべ
事實を考へ乃こと多し。我國の人も史を贊ること有り。
姫氏國乃言を信じて秦伯を誣つる。佛者い大日孁乃
名を仮て大日如來と。あるは周禮道言の形とおな
じ。亦面直の義よりそむく。實は神祇乃罪人也○盛曰
天地開闢乃ちぐ先ちり我ほろぼ。大日本を秋津洲と
号し。我君の子世〻続と傳る。西漢天照を神の神孫也。
呉い秦伯ちりはじまる。世乃相をくれる事數千載。日
本なんぞ秦伯の後をくんや。史記呉世家を按るに太

伯卒去て子なし。弟仲雍立て後十七世夫差越乃為
滅るを滅さるをしりて我朝孝昭天皇三年にあたる。
夫差ちり前は呉日本へ通ぜず。異域の人我國へ来り
て臣民となるを者あり。を氏族を蕃別と云。蕃別種
類甚だ多し。を氏にて私習氏あり。新撰姓氏録云。私
習い呉也夫差の後なりと。呉人我朝へ来るを乃姫
なり。日本紀へ載へ。後亦天皇三十三年癸巳二月阿智
使主都賀使主を呉へ遣し織工女を求しむ。使者
を知者をとる巖にそゝる巖乃王則久待波久待志二

人を深くつゝしまるゝことゝなりぬ。されどよりつゝく長き通ぞろ事を
はぶくり紙類くり長き通ぞろ乃姑なり長き工女兄嫁弟嫁長織穴織に
人をあるこゝろ。今紫服と太織冠編笠執政乃ときゝ所漂
乃彈尼法師對面るゝ維摩經を演ず。
くり長きを對馬濃とゝ。長きを乃原記なり。越を
ときを古伯を天照大神といふ事。いぢまの書ゝも
ゝこゝ。日本紀纂疏一象羅良公乃依ゝ讃書を考ふ
ゝ。姫ゝ婦人の美稱とあまぐ。ゝゝ天照大神ハ姫組
乃陰靈神功皇后ハ中興の女王なるゝ。國俗姫氏
國と稱ゝゝゝ。ゝゝ字ふゝ義ふゝゝ

紀ゝ。長き髮をゝゝ俗依のあやまりと考ふゝゝ
○賀茂皇大神ゝ道化乃雷をまつるゝゝ。ゝ
ゝ踏乃女の髮ゝ子ゝゝ云依
俗依云賀茂社ゝ化の髮神ゝゝ。一依ゝ
むり踏乃小女一依ゝ賀茂健角身命乃女子ゝ
あらゝゝの矢ゝ鴨川ゝ
ゝゝ檜ゝ櫛ゝ
檜姫一男子ゝ。父母むゝ
向ゝ乃子あゝゝ男ゝゝ

男子三柱よるがうとき。酒食をまうけて里人を宴し。
男子は杯をとりて。こしめ酒。又乃および酒とをすゝめ。兄杯を
少くして磐よりの伴の矢れ下にをきて雄よ雷よ化して
天よりの下り一夜よいけ矢たちまち雷となりて矢よりふるとき母もまた同じく天より
ひらびまりそのもち二人ともよくぶつて各神となる。賀茂
別雷大神神代神祖神これなり
今按ずるに伝基ご非なり。賀茂皇大神は造化の雷神よ
あらざるべし。又世に宗の女乃子にあらざるべし。本朝往古よりこれい
擾と杵ゐる。外宮は磐余彦神武帝のゐよりてとも
伊勢こおるべく斎院をうゐよい別雷皇大神と稱ず。

下ゐる神祖皇大神と称ずべし。古歌よ天降る別雷の神代
より天津日ばさは後せざりうとゐるふ擾ゐ杵
ゐるの天れ八重雲成穂威乃乃別よ道別て雄蒙月
向嶽乃ゐる千穂の嶺よ降臨ありしより皇孫美世
まずも後ざうと成ばとのゐ賀茂皇大神ゐ記ゐ。
子孫振神代のむゐ。天乃八重雲を打ゐまして。月向
乃国嶽乃ゐる千穂乃峯よ天ばうゐ世ばひ。ゐ樫大
宮ゐて人ゐうぞうゐ
うばうゐの峯ふやどりるいて。ゐ成の国田丸
賀茂よ遷坐ゐ。ゐ上ゐ擾ゐ杵ゐるよ
山城国乃一ゐ也 又云。平城帝

帝嚴命ありしとき。帝 差戦 天皇 長髓彦
を征伐ゝ給ふ。例をおぼ〳〵しく出さしめ給ひ。饒速日命
神は勅使をそへらるゝ。帝いはく。神武天皇
に力を添らるゝ。天下 平 ゆ給へ。
女をゝてまはらるゝ。帝 命 ばゝ
ありとゝゝ。 天下 般 余 ゆ
依嬢を 并 犯 ゆ ○或曰。饒速日命
ゝ依 之 ゆ 別雷ゝとあるとゝ記ゆ。別雷
なり。山のゝゝ神 号 ゝゝ。俗伝ゆ
ごとく雷神をまはるゆゆ。天 国 殺 と

ゝ問ゝく。爾流 ゝなり。震 轟 を 深らゝ 皇 太 神 ゝ
神号を下〳〵たまゝんや。ゝゝて皇太神を 祭 ゝ
伊勢 乙 所乃宗廟。 別 賀 茂乃 を例をゝゝ
ゝ 慶 含 の心 国 ゆ 生 ゝ 太 神 ゝ 国 ゆ
神 を 皇 宮 ゝゝ ゝ べゝ ゝ ゝ の神を 神
号乃 嘉 号 ゆ ゝ ゝ を 記 て 参 ゝ ゝ ゆ。
天 霊 ゆ ゝ 慮 ゝ ゝ 祈 ゝ ゝ
たり。天照 太 神乃 託 宮 ゝ ゆ。我をまつゝん者 い ん 受
太 神 を 宗 ゝ ゝ ゝ 神 ゝ 皇乃一字を 海 ゝ
ゝ ゝ ゝ 雷 神 の ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

ずや。天皇乃始祖にあらぬ神には皇の字をゆるし給
はぬ事。儀式にて大神宮皇字沙汰文にも見えたり。ことに
舎人王の日本紀を修したまふにも。神代上巻は伊勢
二宮乃深意を記し。下巻ハ賀茂上下の本縁を述たり
といへど他に異なる神を宗とせられたる尊敬せざらんや

○八幡に菩薩号あるの説付弘法大師と手の御影乃説
并八流乃幡下る説

俗説に云。應神天皇位をたまふに譲りたまふの後。統世に
くだり佛ととに帰依し。崩御の後託して僧となりたまふ
を称ひたまふ。そのうち桓武帝乃御宇。勝尾寺の開成

法師に託宣ありしによりて菩薩号を授らる。是本地阿
弥陀如来なるゆゑなり○一説に八幡大神弘法大師と対面
ありて。たがひにその影をうつさるゝ。これを手乃御影と
なづくといふ○一説には應神帝崩御乃後託宣ありて赤
白乃幡八ながれくだる。これによりて八幡と号すといふ
今按ずるに右の説各非なり。應神帝の御宇には百済
使王仁等の博士どもを来らせて儒教をひろめて我朝に
行はる。佛法の事はかつて此国に及ばざるなど。此御宇より
数百年を経て。欽明帝の御宇に。百済より仏像経
論を渡せり。然れば菩薩号あるべきを世ぞのも知ね○又

八幡大神は菩薩号をもくらまして。摂政帝の帝
宮ありといふこと。たもあるべし。帝基ぐ仏法を敬信
するゆゑ。僧乃言は偽りなりとおがむべく菩薩号を
賜り給へる事もあるべし。さて正史は八幡宮。
勅ぐ本地垂迹といふ事なれども。ぐ
迹神帝を本地とする八幡大神は垂迹といふ義は
おのづく害なるべし。我日域の神と竺土乃君を混じ
て同一体とするにいたる。神明は肩を道理は
さらぐ。を罪なんぞ滅ぐんや○又八幡弘法ぐい乃
沛影の事。僧ぐるおぐるゆゑ。年暦相乃ぐれるを以て

を濫りとするべし○又八幡ぐれ乃幡乃ぐる事。或人の説は。
幡を人工をまちまちく後は成地なり。或電霹靂乃ぐく
天ぐり落ちる物はあるゆゑといへども。八幡なり紀は
迹帝神帝陛生のときに八流乃幡を立てく軍をして
邪業をいまし給ふまつり。
汎せるゆゑ。
○祇園牛頭天王は天竺乃神といふ説
俗説云。小天竺音縁天の王舎城に貴帝と号
す。三界を遊で法界を探顕さり。天刑星と名づく。安婆
男よりぐれて牛頭王といふ。毘盧舎那乃化身迹

ゆうちい人るゐ類すといへども頭を犢の角といひて祇
園牛頭天王ごとし。ちまたをまつりて祇園社と称す
と按ずるに。日本紀纂疏に。山城國祇園神社則進雄
神之化迹。公事根源備後風土記神代直指抄を
考るに。素戔烏を牛頭天王といひ武塔神ともいふ。
社伝に。祇園社牛頭天王をいひて感神院
といふ。故あり。良下宛上を咸なり。良は少男。素戔
烏。宛は少女。稲田姫なり。咸は感にして夫婦の
道なり。咸の卦。上は艮。下は兌。艮は山。兌は澤。
このゆへなるべしとあり。山澤と説て俗伝の説を知べし。

○素戔大明神仏を作ることを俗伝に云。春日大明神さざれ石に佛をとどめ
よあり。世ふこれを素戔の神作とも
いふ人云。春日とは佛師の名なり。仏像のことにあらず。
楽の仮面をも素戔が作数多あるを。舊記に贅文舎
利至勲の河内國素戔郡邑の人なり。兄弟ともに佛
門也一伝に文とあり。ちまたを春日ゲ作といふ也。浮屠附會説
に素戔大明神の作といひて世人をまどはせり信ずべ
からざることなり。これらをよあるべし。鞍工大呼乃稱ゲ者
麻治といふ者あり。麻治大明神鞍を作りしを

あやまり傳へ給ひ給ふべし

○任吉大明神白樂天吉野白雲の詩哥の説

俗説に云。唐の白樂天日本の人丸貧乏をたゝんとて

流つゝとゝに任吉大明神老翁と化して釣をたれ給ふ

つゝまれぬ。樂天舟をよせ物をとて。青苔佩衣懸叢角白

雲似帯廻山腰と詠じ給ふ。老翁哥をよみて和して

いはく。苔衣をゝいかさむとて衣貧ねひの夢

をとゝろかれとゝろ〳〵樂天ぞ樂天ぞ〳〵やーさ漁翁

ぞふかくあまぞ釣く見本の老よハ乃ぞまどゆ

つひとぐよ漕わしと云

今按ふに白氏文集に山詩及樂天が東行のすゝ。

本朝乃正史實録任神書うるとゝぞ但江談抄に

白雲似帯圍山腰青苔如衣負巖背おもゝ

〳〵いとゝはひろまむ衣貧ねひの夢をとふと

なゝとゝて都在中ゞ作と記せりふに好事の者

山詩哥とあゝあゝて任吉樂天乃縁者とゝゝん

○京寺の門おゝく癩を養ゝ光人を癩者と崇ふ説

俗説に空海東寺の門前ゝく老人の癩を養ゝに

縁来乃ゝゝてゝれをふりて来る此稚ゝとゝ。癩を

ある人ふゞ有に癩者大明神と号を

と按ずるに妄説なり。諸社記云、元明天皇和銅四年二月九日、倉稲竈神始現于伊奈利山。和漢合運云、和同四年稲荷神現地主神則荷田明神也。其地祀之故號稲荷大明神。豐葦原ト定記云、辰巳乃方に當天倉稲竈乃垂跡阿利。夫此神和百穀於播玉故に名奉。神代乃昔与利此峯に向王母不知。只三峯に顕玉之和。人皇十三代元明天皇和銅四年辛亥二月十一日に垂跡す。誠に諸人哀憐乃御心深久。蒼生作年物和州乃片葉未天百乃災於穰王。下略○公事根源集釋云、和同五年二月十一日戊午初現于伊奈利三箇之峯雍州府志云、稲荷出現和銅四年二月九日也。以長暦推之則其日當初午日。今不用九日而於初午日諸人參詣。俗謂初午參。新撰六帖光俊卿長乃歌よ。

やくもたつひまのあるしとくいなりの社もなしとあり。倉稲命を月ヶ紀を考るに伊弉諾伊弉冊尊飢時生兒號倉稲命と。眞産倍紀に宇賀美多麻神是伊弉諾伊弉冊二柱尊所生神服機殿按ずに勢州宇治郡後に在飯野郡に祝祭三狐神同座神也。故亦名專女神とも。今稲荷乃祢ぎよ白狐を翻るとふ。

和二年三月廿一日空海六十二峯にて寂とあるべ。稲荷出現乃和同四年より六十餘年を經て後空海

生れ出たり年暦乃お蓋を考へ入るべし

○山王権現比叡山に出現の説

俗説に云ふ山王権現をむかし伝教大師小比叡の峯に於て三光の月輪を乃ふ釋迦弥陀薬師乃像をわかち伝教を敬ひ奉りて向ふ方へ鬱の三点に横の一点を加へ横乃三点に鬱乃一点を添へ伝授して光を放ちて光の文字をなさしめ給ふ鬱の三点に横の一点を山乃字横の三点に鬱の一点を加へ山乃字なり山王権現と称ふ事を付け天子植武帝に奏し給ひ帝感ぜらるる大師と称ひ奉り

にて堂塔伽藍を建立あり山号を比叡と名づけ号を延暦と号せらるる山をひらくのちに免地寺に紅舌あり紅を傾し本佛樹頭に光明を放ちて俗を解し給ひ乃奇瑞行り給ひ俗そのこと人寿二百歳乃ときに樵る迦葉佛の記を受く邪辛天に位し大海を見まもる波の音梵音成と聞へ樵る浪乃とぐまるかのよもすがらひく日本に来りまを波羅の海上ふうくふにとぐまるかぎりなくふとの比叡山乃下大宮権現垂迹乃地なり人寿百歳のときに樵る又天

ゑとり君葦原の中國よりつたへ鷺鷥等菁不合なるの世なるを嘆ずる樂く浪しきを志かの浦よりつたへ多魚をはぐくむ義よあり。教ずるの日ぱ而よ法を弘じべしとゝ。義てゝ人て我久くけ地ふるゝ。我人裏六千衆乃ときさりとふゝるまで湖水の七ゝび變て芦原とゝりとゝ。ぱ而ゝ仏法流布の地となゝで我魚をはぐゝ而ゝんとゝくゆゝさぢゝゝぶ教ずるゝんとゝすゝ。東方より業師、必業来りて我人裏二衆のとゝたゝ。ぱ地よゝゝ。老義我ずるゝゝ我ゝゝど。我この地を釋ずるに獻ゝ。よゝ仏法

流布乃ゝとなゝ。ゝゝ縁ゝつゝて仏法東流せゝ。教ずるを教を伝ゝる大師とゝりゝくゝゝを開創ゝ。我ゝこの山乃主とゝりゝ。後又百衆乃仏法をゝるゝゝと誓約ゝ。二佛来西よりゝれさゝるゝかくて千八百年を經て後教ずるを伝教大師とゝり業師必来ゝゝゝとゝ。彼義ハ白鹿祢とゝゝ。今按ゝゝ林羅山義山を辯ゝ。園乃靈山の主ゝ喬仙とゝりて天台ゝ入ゝ。帰てゝを上界官府よゝゝ。令ゝて桐栢ゝ人右衛ゝゝとゝ。桐栢を天台の別称ゝゝ。その廟をゝゝ建ゝゝ君ゝゝ。俗呼ぐ山王乃去

地とと。僧要州天台よ入て智者乃弟子となる。薄堂
の四ぐさをもつてあらたに造る。建堂の日山王と紫
勅し。佛隴より攀よりて山王ととなる。他大よぬるかこれ
を見をさして山王ととなる。唐乃龍外靈樹院の僧か敏
他中よ入りよあくいてく。我山王と舊ありと。そなか源弥
山王等乃号皆山王乃祢山猿山靈の吳弥なり。豎三題
撰一点撰三題豎一点なり。かの〻乃字ハ三点よなぞらへ。
あまをもつて一会三千三千一念の意ハ擬と。撰と
豎川乃ぐひなり。提婆品よ不僧。絶女成佛ことハ絶よ
おのくこともいとも要とと。なに提婆の二字をとりて

提波女乃三字とし。妙法乃二字をとりて少女成
の四字とと。これ謎の類よて附會の說なり。又白
鹿乃祢を湖あ乃毛ゆ。湖あ乃ちゝび憂じ毛音
原となる說なるとい。麻姑ハ東海三為桑田
をなるといまを傳くまつるなる。釋迦ま
那よ来ることいなんや。白鹿乃祢乃ゆ說を
佛にゆづるとい宝光真人ハ天台を智者よ傳乃
古事を毒合せるものなり。かの山說ひくくれたる
先。地をほるよ。行者ハ縄說彌し。本佛樹頭よ
ひとり說なるちて語を解せ。とと。小齊成道の

とき。并州乃東山に経を誦するもの了系ありしもあまたを
見るなはひとつの舌のこりあり。彼徒乃いはく。法花を持
たもちしものゝ舌六根やぶれども。かるがゆへに舌は残れりと。
又五侯寺乃僧雍州の僧。常に経を誦すと。死後骸
骨ことごとくちりて舌のみを存せりといふなど。布納乃事
ところみゆ 今按ずるに西樵野記するところ蒼石のこと ありて華厳経を誦せし事を載 又木仏霊
ありといふところ。木仏不渡火泥仏不渡水。衛安と
いふなるべし湖のそこでにみえけり。此中まことみえたる
経んや水乃ふかき山乃幽なるなどのつくり精爽あるを。
時としてく光を発もなんぞなからしむよたらんやとあり。

今これによつて按ずるに朱子語類に云 岳陽の江上に光気あり漁人これを
みるに。あるいは銅鐃一枚を網しぬ。又あつて水にえりありしを得らし
ふるふ銅鼓一顆あり。又俗に仏燈といふものあり。是おそらくは宝気腐草之類
螢乃ひかりなり。蔡季通が説に。廬山に光あり。人そしてくうてひかりにひを
ほのおに出るとそし。又峨眉山に於て夏乃こし光白気ありて円光を
あらはす事猶乃ごとし。其中に仏あり側に人あり。水晶乃ごとし 日
中に見られるとこれをてらせて見えなてあれ山中に一物ありて 日
そしめて出るときこそ気そてらし。ゆえに人乃かげを映して仏影の
ごとくにみゆるなりとあり。宋名臣言行録に余靖襄公が舎利を
論ずるに。腐草背光あり。みな精珠乃すろとさえりあり。なんぞ異ならんと
いふといへる 確論と云べし （　）余考るに比叡山乃号は桓武帝伝教
大師と意を一つにして無縁といへども旧事なし紀に
近淡海国比叡山と古事記に日枝山 又作日吉 二十一社記云月吉比叡し
語也 一称と見えたれば此号上古よりある事明らかなり

あるる所乃神を大巳貴命乃子大山咋神なり。奮事
紀よ。大山咋神坐近淡海比叡山とあるを見なち
ある人乃俗よし地名を石礫駅盧舎あれなり
玉神七代をみる。按ルニ日本紀纂疏ニ云フ磯駅盧島江州叡山 所謂七代ハ國
常立尊。豊斟渟尊。埴安尊。泥土煮尊。沙土煮尊。
大戸辺尊。大苫辺尊。面足尊。惶根尊。伊弉諾尊
伊弉冊尊。これを七社ゆ号とし二神のめ
ぐり給ひし沖拝乃あるこ。あり。心沖拝記ハ載乃圖
よひとこあるを俗人は沖拝を相輪樘と称をを
ざるこ。今ハ知人もあるゆといつり。又向祭神ハ神

祇ゆ宗よ猿田彦命を祇ゆとあり。是等ハ俗を以て
俗伝乃お遂を知るこ

○出雲大社よ毎年十月法神あつまる法よ伝
俗伝ニ云フ。毎年十月ハ國中乃神祇ゆの大社よあ
にまりるよこの年よ出月を法雲ゆ神ゆ月ゆ云ひ
出雲にくを神なり月と云
と按るよ事神書ゆ史ゆをかつて乃ことゆ出雲風土
記ゆを按なし。余民ゆ小伝ゆ記ゆの人ゆ含
ゆてこれを問ゆ。神ゆ月乃法他ゆをくハ聞ゆこと
ゆ神どゆを。出雲をくをかつくをどゆたぐをべく神ゆ

月をいふと答へつるある人乃説によれば月を神無月といへるは純陰乃月なれば陽無月といへるを陽を也訓ずる乃鬼は陰乃霊なり。神は陽乃霊なり。鬼神を和語におにかみと訓ず。陰は音おん和語にはおに也訓ず鬼なり。銭をぜに也訓じ。紫苑をしをにと訓ずるがごとし。陽をかみとよむ。神なり。しかればかみなと陽をさしていへる。神無月と陽無月なれば也。然人がる説くあまを陽月とのたまひし無純陰乃月といふも陽はまだひろくあらへなまぬといはんがためなりといへる。此説をもつて正とすべし

○鹿嶋大明神要石乃説

俗説云。日本を背に負ふなる大なまずありてうちさんとし伏ふといへども。鹿嶋大明神なる石をもつて首尾をさしつらぬき給ふなれば。ゆるぐことなし。若なまずゆるぐ時は地震をなせども其要石ゆるぐともまやぬまでし此なまずめいし鹿嶋乃神のあつひがごとなり

と按ずるに童蒙女児乃談論ぎる事によるべきを也ども地震なる鎮のあまりあうども伯陽甫が説に天地之氣不過其序。若過其序。民乱之也。陽伏而不能出。陰迫

而不能升於是有地震是陽失其所而填陰也と乃て
さらり。神社便覽より石作柱者石腐乃際尚神明在
也神誓見神祇正宗也と紀ありまどるもしに従も
正とさらてるるさどたづ〳〵神代巻の高皇産霊命
倉稚産霊命武甕槌命 鹿島大明神 経津主命 香取大明神 芦
原中國を平ぐ二神出雲國五十田狭小汀に降りて
十拳乃剣を接ぐ倭建命を踞て鋒端とあり或曰あ
やまりて石拳を立るる或人絵乃まを消ゆ〳〵
さるるや。蓋〳〵石拳を立るる神乃の深意あるや。
余いまゞさらるを家に載ふ物もれ妖妄に従を排るを

○熱田大明神揚老妃とさらて唐朝を乱し孫に従
附 草薙乃剣
倭伝に云ふ。唐の玄宗皇帝貴妃とうぞくんとけるまろ
あり。熱田明神揚老妃と生れて玄宗乃んを蕩し世を
乱し。貴妃とうつ乃漢をやめさ孫ひぬ。そなは揚老妃
馬嵬にて殺されて玄宗妃ことにえど方士に従遣し
て生妃乃霊を召らまきて草薙乃剣を求ゆ〳〵まりてとく
召まるる。熱田さりとさくけ乃従蓬莱海をつひ
他へ生妃ご剣を献を社乃うち〳〵海よりて。側よ玄宗の
塔婆をさり

と称するよし従基ご邪ちう。熱田社へ草薙剣ありて
日々崇るを乃雷をみのまちて。尾張國風土記云熱田
社者昔日本武命巡歴東國還時。要尾張連等遠
祖宮酢媛命宿於其家夜頭向厠以隨身剣掛於
桑木遺之入殿乃驚往取之。剣有光如神。不把得
之即謂宮酢姫曰。此剣神氣宜奉齋之爲吾形影
因以立社田郷爲名也。とあり。ちうまぐ也。
又方士ゞ見ゆるまうしまを。八面史伝神書よりてゞ
唐詩解長恨歌評より彼方士ゞ出る也。
楊貴妃馬嵬にてあくに殺されしとき花鈿をの民に

散乱せるをひそかにかくしてあさむきてあるうちん
他乃術あるふりをゞと記せり。此説をいとも信ずに
さられと。ちうそのうを好事乃者ちうて蓋然とうつ
て見ゆるまゝ。見ゆ紀舊事紀なるよ裁。見ゆ載
るを姨傷嫉の沛を泡を泡。婦女乃ちうちよ似て。
川上梟帥を殊。それ屠踞伊勢國能褒野ちう薨
じまうをちうく。贈國の祢揚ゆ妃とちうく云
宗乃ゆを鬱。ちう嵬よ死せりと妄作せりものちう
をゝて見ゆすちう蓋ゆ年と絲ちう不絲。或曰熊野
日本傳説 或曰富士 義楚六帖冨士縁起説 或曰熱田 曉風集説 或曰加

蕪白山 日本後紀ノ説　或曰摂津ノ住吉 六家抄　或曰伊予ノ三島

豫章記ノ説。むかし蓬莱方丈瀛州の三嶋うかびおちて此日本にとゞまる　或曰安芸ノ厳島 源平盛衰記 帝王編年記説

或曰丹後国 丹後風土記志説 とあれども列子ニ載五山一曰岱

輿二曰員嶠三曰方壺四曰瀛州五曰蓬莱其山高下

周旋三萬里其頂平処九千里山之中間相去七万里

とあり列仙全伝ニ曰。有巨鱗之鼇負蓬莱之山而抃

舞戯滄海之中也又呉寧野ガ小窓別記ニ曰。三壺海中

三山也。一曰方壺即方丈也。二曰蓬壺即蓬莱也。三曰

瀛壺即瀛州也。其形如壺上広中狭下方皆如工製

とみえたり。日本にかくのごとき所あるべきともおぼえず

はなはだまよへるなるべし。本邦乃文人詩客日本を称じて

蓬莱洲と云君子国といひ。扶桑若木など云へるがごと

く。其佳称をえらみて。実に日本をいふにはあらねど。

○熊野ノ神天竺より飛来り給ふと云説

俗説ニ云。天竺摩伽陀国ニ善財王 一ニ作善哉 本説ニ とくうをつ

おはします。妃五衰殿の女御懐妊したまふ。他の妃これをねたみて

祢宜。善財王が留主をうかゞひ。官人をかたらひし。女御を

女を山中にて殺さしむ。其死後にいたりて屍母子ともに座

くれし山に喜見上人と云者住せしが此子の絶とをひろひそだ

て後に善財王に此子をくわりはしくなどて。善財王此児を

鼻ノ。蛇形乃車ヨ系ラク。月ヶ谷ヨ来リ。ヨミリ乃劔を
ちげらく。そ緣境をひんるふり。ヨ巻の國巻山と大和國ヨ
とぐまりて。八角のふり搖石とちり。ヨ八尺乃熊と化し
て。紀別ヶ所ヨ多ヶ所ヨ来りあつまるふ。こみ系ヨ熊野とふ
ぢく。吾財を皇子ヨ山ヨ所ヨとぐまりらく祢と況ど。ヶ谷系
き喜見ヨ人。新ふ系き吾財を。祢ヨ宮ヨ。西ふふ八ふ妻
殿乃吾法女なり。あきを熊野三社と号ととふ。ヨ一
祝ヨ八秦孫福（一作徐市）蓬萊ヨゆき系をりとむとて。し
ヨりしくり死しくるを。熊野を探況とまつまりゆを云
今按ふヨ祝ふ吾非なり。神代巻云伊弉冊ふ史神

輔軟突智を生ませとき物れく祢退去ぬ。ヶ紀別
熊野とみくる村ヨ葬ふ。ヨ俗し神魂をさつふふヨ花の
ときを花をもりくまつふ。ヨ鼓吹幡旗を用弱舞と
系ふふとあり。ここ花ヶ所なり。崇祢天皇六十八年ヨ遠
志しを。ヨ海ヨ遣ヨ男事解男とあらせふと。祢
系帰ヨあり。ヨ小熊ヨ三社なり。異稱日本伝ニ那
智三寒書曰。ヨ花ヶ村ヨ。ヶ屋面ふあり。伊弉冊ふ神退
乃地なり。そ系ヨ深窟あり。ヨ曰。ヶ屋ヶ窟。赤曰花窟と。
伊弉冊ふ祝葬ヨ。ヨ巻ヨ。ヨ而これみつ。ヨ巻ヨ縄とり
く花及幡旗をたくり。囲繞し祭ふちくさつふ。祢

代の老僧なりと云へり。又徐福日本に来り神仙を
ちぎるまで正史実録にうつくしき。されども古来待客
文人あやまりとなるまでも。言伝説し真ふ事どもの事
僧なり。ゆゑに名を三神山と云
○弘宗禅師の日蓮を犯りぬ。地蔵菩薩の霊にて地獄勝軍
僧侶に云。弘宗禅師の釋乃日蓮が霊にて地獄勝軍
地蔵なり。此方に我家あるまををる縁を
今按ずるに此説非なり。僧侶の事もちがひ
なり。されにつのこゝあるべし。登檀必究よ。日本愛宕山
霊感地蔵王と犯せり。されは日羅が霊よ

あらんと。地蔵菩薩なるべし。伊弉冊尊と史皇尊霊合体也。
ちぢめ山城国愛宕郡よりまつるあり。愛宕社と号す。
陸奥丹波国桑田郡ゆうまつるあり。
らくあるべし。愛宕記に天狗第七乃陰神なり。
火災をなすべく退散なんなりあるべし。
をなすとあり。此神火の霊
も。軍敗実智ゆやうまつる退散ぐく
勝軍地蔵といふ事は仏種よりなる説。天竺
中に学僧といふ僧我朝武を離れ出るあり勝軍
乃二字を附会せりといへり

○金峯山神を金剛蔵王菩薩といふ。或は安閑帝の
靈を祀るかゆゑなり
俗說に云ク大和の國金峯山の神は金剛蔵王菩薩といふ。
あるひは安閑天皇の靈をさしたりと云
と按ずるに。金峯山の神を蔵王といふ。安閑帝は此靈
にあらざる。諸社志和爾雅に金峯山神社は少彦名命を
祀せり。豈今村ゲ云ふか。神代より吉野の山のうちに
たくさんまつる山川をこゝみとあまた。少彦名と云說
信ずるにたれり。思ふに延喜式などの金峯神社也
ちりのみづく。神名を載ざる說見。圓覺經首楞嚴經等

に載ずる金剛蔵王菩薩を附會せるかゆゑなり
朝にあやまり來れるものあるべし。義楚六帖にも見
を出せりとく。弥勒菩薩の化身と記せり。
○富士淺間神は赫奕姫を祀るとつたへ說
付富士山孝靈帝宮の頂ぞろ說
俗說に云ク孝靈帝の即位五年に近江の湖水溢て河内
富士山あらはるゝ。その後は國土老婆あり。家は貧
おこし壤を物成何。あるとき竹の節のうちに一女を得
なり。そのうち甚ざかしく美しくやく成よ
赫奕姫とぞつく。ほの帝振武帝坂上田村麻呂勅使

とうてくかまゝ紙紬く妃とせんとゝ云に姫どゝいとく。我さ
天女なり。ゝ〳〵を言ふとゝ言ふとゝ言て。富士乃
巖窟よりゝ。帝山ゝ〳〵紙敵寺あり。ゝ紙をもゝし
弼よりゝ。ゝゝ姫出むうひていく移づくき天子
山窟中にゝぐまり移色ゝゝゝゝゝ窟よ入てゝ。
ゝゝゝゝ玉冠ゝゝ移ゝゝゝて陵と
す。ゝ紙富士濃寺大権現と号ゝ。義ハ和し蓮明神
壤ハ大鋼明神と申ゝ。又一説よ赫耶姫を不死の薬
を帝よゝまりきるゝ。帝　あゝまをゝゝにうゝゝ
弓よハ弼ぬ薬を仕ゝゝ。ゝゝゝ富士のいゝ紙よて

やゝゝゝてらまてゝうゝ。ゝ煙今ゝのゝまりとゝ。又一説
よハ赫耶姫を鉄明帝乃妃ゝゝく。聖徳太子乃御母
ゝりゝゝ云
或云孝霊帝御信の五年に近江国ゝ湖ゝ初海駿
河国よ富士山乃見出と。是見出紀よ載ざるゝ不にゝく
都言道良香ゝ富士山紀ゝゝまゝゝゝゝをいゝゝたゝ民
俗乃亜称の従信ゝゝゝゝ。○或云第三集よ山
色赤人ゝ富士山紙ゝゝむ移よいく。天地乃ゝゝゝし
ゝゝゝゝ神さびゝくゝゝゝゝ移ゝ布士のゝゝ指と
天乃原ゝりさけゝれゝゝゝゝ日のゝげもゝくゝひてゝ

月乃ひかりもはんぞとの名もいはさるべうはすくぞ
雪をあうまきつかうとかうつぶつひたぶるゆうむ富士乃うる
根をぱ山彩をとりて富士乃神代ようあるまま知ねど。
隣よ近江國高山東海道よそぐうち中よ大水を湛ふ。
あううを海乃ごとくぱ人力のひらく所にあらざる況や一
雨よ地さけて大湖をなしぱ富士とうれう
乃事あらむや○今按ずるに赫耶姫が事。竹取物語よ
さぬさ乃造とつひまる者。竹乃ふ女をとりあげて
赫耶姫と名くみて紀ねまどもの時乃帝ハ泯とうのと
のぜうど。姫ぐの昇天の事ハあれども。崖よ入て神とうり

事ハ見えぞと個〳〵空穂竹取ハ作物語なれど撰ぶ。
非を論ずるに立ちうぞ。第葉集よ竹取翁といふ者を
載ぬまどを別人まうく赫耶姫ぐ事ハ。又桓武帝
かくやひめぐ行を追て若よ掘中よ入りまうう甚非ぞ。
類聚國史云延暦二十五年三月辛巳崩以山城國葛
野郡宇太野爲山陵地拾芥抄云桓武帝陵在伏見山
とあうぞ紀ぞ。ぞ。又富士浅間
神ぞ木花開耶姫ぐ。伊勢浅間神ぞ同神ぞ。舊
事紀日本紀を考ふるよ開耶姫を大山祇命乃女瓊と拝
まる乃妃ぞ。倭姫世紀鎮座本紀を考ふ。倭

勢朝熊ニ作ル神社六座。其中櫻大刀自神、櫻大刀神雙坐ス
霊花木座ス。大八洲櫻樹始テ從リ天上降リ居ル。因テ以テ為ス花開
耶姫命ト　とあり　伊勢志ニ云ク度會郡櫻宮小朝熊六座内花開耶姫櫻樹ニ生ス故ニ曰フ櫻宮ト日本櫻之始也
あるは人云ク富士乃古歌よ櫻を詠ぜることのあるは雪ふ
比ふるにはあらざる。ことに花ありといへり。是
等說をうくるよ開耶姫赫夜姫相似たるが故によりあや
まりつたへ。剩好事乃者華陽国志よ載ける男子
乃ますよをぞくへ說をなせる說なるべし。又不死の藥を
燒とて烟とふのことといふよ說けるあやまり也。そもそも
和漢ともふ砒礬硫あるところよ火あり烟けり。博物志ニ

載ス須弥山ニ有リ石流黄。晝ハ視ルニ孔中ヨリ上ル状如シ烟ノ而高サ數尺。夜
視ルニ如ク燈光明高キ尺餘とあり。これよ載富士山信州乃淺間
嶽肥州乃阿蘇山をみなしかなり。又赫夜姫ハ欽明
帝の妃厩戸皇子乃祖母といへり。孫妄說なり。考ニ曰
本書紀用明帝母堅塩姫ニシテ欽明帝ノ妃なり。蘇我太
臣が女也。間人ノ妃（聖德太子ノ母）母小姉君ハ欽明帝の寵妾にして
蘇我稲目が女なり。是らを考へて俗說乃誤をしるべし
○粟嶋大明神ハ女神なる故よ婦人の病を守るよし說
俗說ニ云。粟嶋大明神ハ住吉大明神乃妃なり。帯下の病
にかゝりうつぼ舟にのせ粟嶋ふ流しなされり。此故よ

婦人病をいたみなやまるゝ霊験ありとゝ
あゝ人云ゝ。栗隅明神ハ女神よあゝ〻ど。たゝる宮霊験ミト
子おゝ尊名命ゝ。神代巻に大巳貴命与少彦名命ハ
をあつ粉天ゞトを経ゆゝ。又弘見蒙生及畜産のゝあ
よゝ病を療ふ乃方をさゞゝ。多數昆虫乃災異を
ゝゝゝむとあよ。林の厭のはを定む。家をゝゝく百姓
ゝふいゝゝまゞゝくゝ恩頼をゝゝまゝ。後よ
大巳貴命謂少彦名命曰吾等所造乃国豈謂善成之
乎。少彦名命ゝ入ゝ。あゝゝひゝ成ゝ而もあゝゝゝい
成ざるもあゝゝて。淡島よゝゝ行ゝと記せゝ。栗隅の

神社ゝ紀伊国名草郡数国小あゝゝ少彦名命
大巳貴命小ゝもゝひ行ゝをめゞゝゝひ〻ゝ於よ行
神とあゝ行ゝ。病を療ゝ乃法をさゞゝ行ゝひ〻ゝと
婦人乃病みゝを愈し行ふゝ。大巳貴よゝむゝて淡
島よゝゝ行ゝゝ。病よゝゝゝゝ陽神ゝ謂せゝれ
ゝゝゝとあゝゝ
○大隅国八幡宮ゝ天竺陳大王乃孫ゝ云伝
俗伝云ゝ。大隅国八幡宮ハ宇佐八幡宮とハ別神ゝ。
ひゝゝ天竺陳大王乃女七歳ゝゝ懐姙し。ひゝゝ男子
をうむ。父大王ゝゝれ人の子ゝゝゝゝと問ゝ。女我覚小日輪

はかいとなく懐姙とぞ。文あるべきことにあらず。王いたく怒者なるべし。仍法流布の事よあらざ。宮あるべく。嶽祇よ母子共国よりて流罪被刑畿内よりとなく。霊祇よ母子共の船て塗海よ押流しまうよ。此船見ず大隅国よ着。而の者共あまをを引あまをを人とをよをごうる。笹三まうが。彼男子とでよ七歳よなり給よて。番ず集人といつ。おろかなく。此母子共ゆくと害せんとしまうに。男子ともまうち神妻をあらい〜。我をあらく集人を深母子ととふ神となり給ふ。今の西八幡宮是なり

と給ふよ此基ご非なり。法神記よ大隅西八幡宮い

中八幡神天皇ゆく神功皇后ゆ仁徳天皇とあり。或曰ゆ〜大隅薩摩をさして集人とと。集人おわを

まうぐなり。姓氏録云。大角隼集人八史部隆命よりおと

いつ。日本紀よ隼人大隅と記し。第巻集よ集人薩摩と

あり。職員令集解よ薩摩大隅の西人和いるむを後を

服と。ゆよなぎ付る者我集人と号ととゆえり。政事

要略云。養老四年大隅日向西の集人乱をおこと。

勅しくせるおる宮勢首男人をもいく将軍とと。

八幡大神よ祈りくあまを我うつおりくの集人を殺し

て大よ捷とあるとゆよは法をもいく陳大王ゲ孫の

事を作まうしたり

○巖嶋竹生島江島祢ハ弁財天と云伝付三祢を

辰狐ヨリ乃女といふ伝

俗伝云巖島竹生島江島祢ハ弁財天といひあるひハ

龍女といふ。一伝ハ天竺辰狐ヨリ乃三女貝ヤウ飛来る天

女を巖嶋。赤女を竹生島。黒女ハ江島ヨリ飛来ると云

と按ずるに各妄伝なり。安芸国巖島祢を一宮記を

考るに市杵島姫命なり。神社伯耆郡ヨあり。伊

都岐島とも書し或ハ巖島とも書と。考日本紀

天照太神乃索取素戔烏尊十握剣打折為三段

吹棄氣噴之狭霧所生神號田心姫。次湍津姫。次

市杵島姫とあるを見たり。近江国竹生嶋乃祢を

宇加神竜稲女なり。神社啓蒙同。竹生島の祢社ハ

宇賀神泥祢ヨリ近江国浅井郡。古事紀同。素戔烏命

娶大山祇之女大市比賣生大年神宇加之神泥祢と

あるを見たり。相模国江島神も宇賀神竜稲女なり。

神系譜ヨリ宇賀神泥神相別榎島祭之。山崎氏ガ伝ヨ。

江嶋神者宇賀魂稲女也。弁才天者浮屠假託爾と

いへり。○ある人乃伝ヨ最勝王経ヨ。辯財天為闇浮之

長姉。又云在坎嵜及河邊と記ヨ伝ヨリ。ヨ

ふるの熊野の神及女神をそなへ奉る弁財天と書
合せるものもありといへり。こゝもものこゝふあるべし。近世宇賀
神經を詐作して世を惑はす。地蔵秘記などいつ紙なり。
宇賀神を地蔵の垂跡と記せり。劉へ云世の神書ふ
弁才天のまたの名宇賀神を梟が妻姮娥月宮にゐ
くゞまるあり天女と号ものありはるべうるどや
○大蛇八岐の神と云。蛭児を夷ほと祀ふ説
俗説云。大黒八天竺の神なり。僧教大師のときはじめて廚
山に出現あり一説に大蛇猿田彦を神なりとも。又一
説に云。伊弉諾尊伊弉冊尊蛭児を生給ひ三年まで

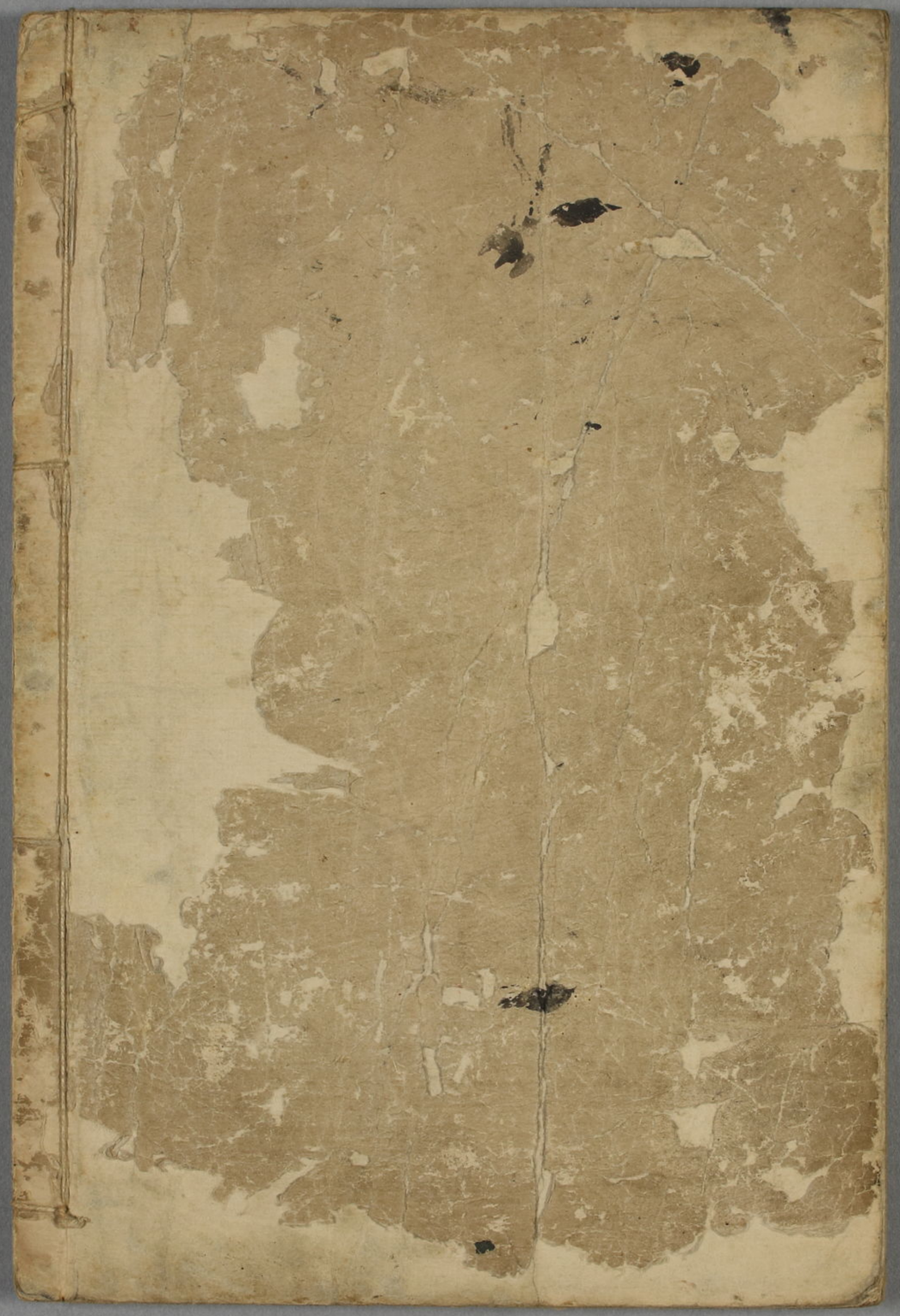
足なくざるふれこれをふうんぐく。天乃鳥船様船のせ
て風乃まゝふくそらるゝまゝて流るゝ。ふる紅葉乃間り
あぐれつゝ。ふ乃夷ゑびすりそぐ夷ゑびすと号ゝ。後
に神に祝ぐ。西宮大明神これなり。一説に恵びすと
早貴に起く火を吹くこゝろ。
といふと略して蛭子と号ゝ
今按ふに大ゝ神なるべ。又猿田彦よあるべ。
大黒記云。大巳貴命を
たゝひ孫に事奉紀古事紀よ乃歌ゝ
よ。大巳貴命ハヤガミ上姫を娶らんとゝく食を負ふゝくゆくよ。嵐
あらゝく内い冠ゝ外ゝ浪ゝ知せつひしゝゝを乃歌あり

椎をうつまゝ。椎をうつ他なり。世を弥敬乃義なり。夫
大國を大國を。小国を大国貴七名の其二なり。俗語に
大国を。容あり。類聚本源に云。大國を命を祝つ也。大
黒乃洲大国を。とちく大国を容乃洲大國を。と似なり。
且つ是れ音已貴とゆゑ。小ぐ。あまこれ物語〜くあやま
ふのこあり。後よ大国乃像。らふふ。ふ。神り服
をうつ。西海我國乃俗なり。又国い水亀に小方ゑ乃弥
ケ浦ゞ有へりとゝへ。又弦ゑ三尊で是たくざう有
二弥あれをにくんぐ。新よのせくをうちゑふとゝへども。
いやゝをゝ民乃ゑぐひまうぐも。瞬人をうゑみ一人ゑ

なのれひけうひなうふ幼兒ゑ俗乃罪をうく。一柱乃
弥ゆうんく放ちをくたまゆんや。度會延倉乃後ゑ。弦
ゑのをちぶ乃弥をり。ゑをるを乃方をく四季にも寄
野〜三季のをきい御ゑくぐ。四季にて御をうり。
ゑゝ三歳脚不ゑと書をうゑや。天盤掛樣紅よのせて
風乃まふく放ちをりけとゑ。をそ乃方をゑを。
ゑ風を土嚢をり出をうとゝゑ。ゑ徳乃義
いよくあうれ俗ふゆ。ゑあきぐ。ゑ徳乃義
指津國をうれ。ぐそをり。ゑゝれぐを山蛭兒の船
と名し。後小兩を國弥と呼ぐとゝゑ。後人乃俗説

よろく正史神籍よりつくるさ事なり。史記より出
ぜるもと書大成經より出ずる事しるや。愚子乃
号も又陰人乃附會なるべしぞ。ちをりつく考
まつぞ。大已貴命のみ事代主命遊行しる出ぜる乃
三穂濱より魚を釣乃ぐるしぜ二神交はい
郷地を神ものと於よ人家郷邑とるものとぞりのるべし

九海堂

よく日本紀を讀みてその事ありやかまりや
察るし當時大衆被より蒙る事しや鬼子母
説も又諸人の謬會あるべしぞをまうぞかり
まうでも大己貴命の子事代主命傳しかば其手乃
三穂崎に釣をたれうちあそべしび三郎父子か
顕露事神とあるは人家繁昌しる門をひらくべし

幸朝僧説録 一